

スウェーデンは人口一〇〇万人程度の小国であるが、科学技術の分野では歴史があり、すでに一七三九年に王立科学アカデミーが創設され、現在の温度の単位の世界標準になっている摂氏（℃）は一七四二年に天文学者A・セルシウスが提案した単位であるし、安全マッチ（一八二五）、ダイナマイト（一八六六）などもスウェーデン人技術者の発明である。

このスウェーデンは環境問題にも熱心であり、二〇一五年に国連が設定した各国の環境状況を評価するSDGs（持続可能な開発目標）では世界2位（日本は19位）であるし、最近では二〇四〇年までに電力は全量を再生可能エネルギー由来に転換し、二〇四五年までに温室効果ガス排出をゼロにするという目標を設定している。

このようにスウェーデンを環境大国にしている有力な背景は一九八〇年代に登場したバックキャスト思想である。魚釣りで釣針を遠方に到達（フォアキャスト）させるためには最初に釣竿の先端を後方に投擲（バックキャスト）するが、環境問題も未来のあるべき状況を設定し、逆算して現在の行動を決定するという思想である。

この概念を環境問題へ応用したのがスウェーデンのがん治療が専門の医師K・H・ロベールで、一九八九年にスウェーデン環境教育機関「財団法人ナチュラル・ステップ」を設立、国内の各界の応援により、環境問題を解説する冊子とカセットテープを四三〇万部用意して国内のすべての学校や家庭に配布し、社会を覚醒させた。

ここで提案されている内容は四項に要約される。第一は地殻から採掘した物質を生命圏域で増大させない。一例として近代以後の社会は地殻から採掘した化石資源で維持されているが、これを再生可能な資源に置換していく。第二は工業活動により生産された人工物質が生命圏域の内部で増加しないように抑制する。

第三は地表が自然の循環を阻害する人工の物質によって被覆されて単調な環境にならないようにする。第四は資源が人間の長期的な要求に対応できるように利用される仕組みを構成する。要約すれば増大する人間が消費する資源が地球全体の循環の範囲を逸脱しないような経済活動を地球規模で実現するということになる。

この既存の経済発展を阻害するような目標はスウェーデン国王の賛意や多数の学者の支援もあって推進され、スウェーデンはアメリカのエール大学が世界の二八〇カ国を対象に評価する環境パフォーマンス指数が六位に上昇し、多数の指標を駆使して計算する総合国力の順位でも当時の一六位から最近では八位に上昇している。

この一見すると実現困難な目標の達成を可能にする有力な予測が登場してきた。これまでの地球規模の様々な問題の最大の要因は人口の増大であった。しかし昨年七月に国連が地球の人口は二〇八〇年代に頂点に到達し、以後は減少していくという長期予測を発表した。環境問題の根源である人口増加が反転するのである。

すでに現在でも日本をはじめ多数の先進諸国の人口は減少の方向に転換しており、前述の国連の予測による人口の頂点は前倒しになると期待される。そこで世界は三五年前にスウェーデンで開発されたバックキャストの手法を応用して、人口の増加を前提とした様々な政策を人口が減少に転換する時点を基点とする政策に変更することを検討するべきである。